

日本大学文理学部  
史学科同窓会

# 會報

第十号

(通号八七号)

令和七年三月三十一日発行

〒一五六―八五五〇

東京都世田谷区桜上水三二二五―四〇

日本大学文理学部史学研究室内

TEL 〇三三―五三二―七九二二八

## 史学科左見右見

学科主任 古川 隆久

学科主任の古川と申します。専門は日本近現代史です。二〇二四年度は、おかげさまで法文学部に史学科が開設されて九十五年、桜上水キャンパスに移転して六十年を迎えました。卒業生の皆さまのご支援あつてのことと感謝申し上げます。

専任教員は助手二名を含めて一三名（ほかに一名選考中）、学科事務室は三名の陣容です。学部学生は総定員五三二名のところ六一四名、一年生が一七〇名とやや多めです。大学院生は博士前期課程史学専攻一三名、博士後期課程日本史専攻四名の計一七名（以上、二〇二四年五月段階、学部ホームページより）で、大学院生はコロナ禍前に比べて減少傾向にあり、コロナ禍が影響している可能性があります。

コロナ禍の終息に伴い、昨年度から文理学部の授業形態は対面授業中心となり、以前のような賑やかなキャンパス風景が戻ってまいりま

した。史学関係の授業も、大学院の一部を除き対面授業に戻り、懇親会や様々なゼミ行事も復活しつつあります。学生たちの生き生きとした再び姿を見ることができるようになったのは教員としてうれしい限りです。

一方で、本学改革に向けての私ども教職員の努力にもかかわらず、昨年度はアメフト部の薬物問題が起き、今年度も競技スポーツ部についての不祥事が報じられ、史学科の受験者数も残念ながら微減傾向が続いております。卒業生の皆さまにはいろいろご心配をおかけしておりますこと、大学組織の一員としてお詫び申し上げます。

さて、昨年度は、西洋近現代史ご担当の森ありさ先生のご逝去という悲しいできごとがございました。いつも笑みをたたえて優しく接して下さり、研究者、教員としてますますのご活躍を期待できる時期でのご逝去は、本当にさみしいのひとことにつきます。

森先生のご専門は近代アイルランド史、特に独立運動の政治史的研究でした。二〇二四年三月に日本アイルランド協会で森先生の追悼研究会が行われたそうですので、ご業績に対する専門家の評価は、近い将来形になると思われます。ただ、小生は、かつて行われておりました、文理学部人文科学研究所の資金による本学部の近現代史関係の研究者の共同研究（「歴史班」と自称しておりました）でご研究の様子を折々にうかがっておりましたので、研究仲間、職場の同僚として追悼の言葉を捧げさせていただきたく存じます。

森先生は、学習院大学大学院での学位論文を公刊されたご著書『ア

『イルランド独立運動史』（論創社、一九九九年）において、英国の植民地となっていたアイランドにおける独立運動史について、特に二〇世紀初頭から、一九二二年のアイランド自由国の成立と翌年にかけての内戦までの時期を扱い、独立運動内部の多様性を明らかにされました。

その後は、その多様性がいかなる要因で一つの「アイランド独立史」（最終的には一九三七年のアイランド共和国成立）という歴史認識にまとまっていくのかという観点から、一九一六年のダブリン蜂起（独立派が武装蜂起したが英軍に鎮圧される）をはじめとする、第一次世界大戦期のアイランド独立運動についてご研究を進めておられました。

このように見てまいりますと、森先生のご研究は、敗者や忘れ去られた人々、つまり社会で排除されがちな人びとを歴史に位置づけるという点で一貫しておられたことがわかります。その視点は学部内のご活動でも一貫しておられ、人権委員会で活動されたり、学部内の女性教員の皆さんの良き相談相手ともなっておられました。森先生の傘を形見としてもらい受け、使っている教員もいることは、森先生の人望の高さを物語っております。

文理学部は一昨年、大学本部に先駆けてダイバーシティ宣言を出し、多様性を認めるキャンパス作りを進めております。これはまさに森先生のお考えとも一致するものでありましょう。構成員の誰もがのびのびと学修・研究・生活できるキャンパス作りに向けて、卒業生の皆さま

まのますますのご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

### 追悼 森ありさ先生

〈森ありさ先生 追慕〉

浜田晋介（史学科教授 考古学）

森先生が逝去された一報が私のスマホに届いたのは、東京駅で「はやぶさ」に乗車した時でした。1年程前からお身体の調子が悪いことは知っていました。病状が回復に向かっていると聞いていたのに、突然の訃報に驚きました。私よりも若い先生とのあまりにも早いお別れとなりました。青森までの道中はそうした悲しい気持ちと、森先生の人となりを思い出す時間になり、優しさの溢れた先生であったと再認識する時間になりました。

森先生は私が着任した二〇一〇年には史学科の教授としてすでに講義を担当されており、教員のキャリアとしては先輩であったため、多くのことで相談やお願いをさせていただきました。特に私が学会主任であった二年間に、人脈の広い森先生からは懸案事項の解決に向けて適任の職員の方を紹介していただき、学校内で進行中の問題の表裏の情報を解説してもらったことから、願い書の書き方まで教えていただきました。また、森先生は当時史学科では唯一の女性教員と

いうこともあり、男性が介入しにくいセンシティブな問題の時には、お力添えをお願いもしました。そうした案件に対して全くイヤな表情を作らずご協力いただいたことは、私が学科主任を務めることができ最大の要因であったと感謝しています。その御恩に対して何もお返しができなかったことが残念でなりません、お許し下さい。

森先生、有り難うございました。

〈森ありさ先生との思い出〉

鍋本 由徳（通信教育部教授 日本史）

森ありさ先生が二〇二三年十一月十五日にお亡くなりになり、一年以上が経過しました。森先生は西洋史、私が日本史と分野が異なることもあり、研究の世界で一緒にすることはありませんでした。今、助手当時のことも含めた思い出を綴ります。

森先生が着任された二〇〇二年当時、私は助手四年目でした。副手たちを除き、史学科専任教員・スタッフの大半が男性でしたので、お迎えする時に少し緊張したことを覚えています。女性の副手たちにとり、森先生は心強い相談相手だったと思います。

さて、森先生が「お酒好き」であることは、多くの方が認めるところではないでしょうか。懇親会などでは、楽しそうにお酒を飲まれていました。着任されて間もない頃の逸話。研究室のなかで、誰が話し

ていたかは記憶の彼方へ消えています。先生はザルらしい、「酒好きの先生が、森先生の着任後すぐに呑みに行つたとか」、「そうしたら誘つた側が見事に森先生に負けたいらいぞ」など、ウソかマコトかわからない話が伝わってきました。きっと事実なのだろうと今も思っています。

研究室スタッフみなで食事を計画した時がありました。新規スタッフも招いて総勢十名近かつたと記憶しています。森先生が事務室で、「あら、なんだか楽しそうな話ね」と話しかけてくださいました。「ええ、先生も一緒にいかがですか？」とお誘いしたところ、「ごちそうしてくださる？」と満面の笑み。下高井戸から少し離れたところの店へ移動し、楽しい時間を過ごしたその時が、私が仕事や史学会懇親会以外で森先生とお酒を飲んだ唯一の機会だったかもしれません。

私は現在、通信教育部史学専攻に専任教員として所属しています。スクーリング（面接授業）担当者として森先生をお迎えする機会がなかなか作れませんでした。文理学部へ行く途中の小道でお会いし、ご多忙なことを承知しながら、「先生、そろそろ担当願えませんか？」と話す、「オホホホ」と笑いながら、スーッと離れていかれるのがいつものパターン。ご多忙のなかで、二〇二三・二四年度のレポート課題設題をお引き受けただけことは、本当にありがたく思いました。通信教育部にかかわる相談の際、いつも同じように接して下さったこと、感謝の念に堪えません。

二〇二三年から私も史学科研究室会議の末席を汚しておりますが、

初夏だったでしょうか、二号館（旧研究棟）九階でエレベータを降りた時、目の前に森先生がいらつしやいました。「鍋本さん、とてもお忙しいとききましたけど、くれぐれも無理はしないで、お身体は本当に気をつけて」と声をかけてくださいました。それが森先生からいただいた最後の言葉になりました。当時、確かに仕事に追われておりまして。御自身の体調がすぐれないところ、私の体調を気遣ってくださいていたこと、心から感謝いたします。今、その御礼を直接伝えられないことが悔やまれます。

思い返せば、通信教育部に着任して以来、先生からいただく最初のお言葉は常に「身体に気をつけて」でした。そのお言葉、しっかりと受け止め、これからも日大史学のため、自身のために務めていこうと改めて感じる次第です。

森先生、本当にありがとうございました。

〈森ありさ先生との思い出〉

高草木 邦人（経済学部准教授 西洋史）

森ありさ先生との思い出を振り返ってみると、私の人生の節目に、森先生が大きく関わっていたことを改めて感じた。まず、森先生は私の博士論文の副査になって頂いた。また、私は史学科で助手を六年務めたが、その最後の二年の間、森先生は史学科の学科主任を担当され

た。そして、私が日本大学経済学部採用される際に、私の業績を審査する委員も務められ、面接の際には、当時の経済学部の審査員とともに、面接官側の席に座られていた。そのため、森先生の「名言」や「武勇伝」などを数多く知っているのだが、紙幅の関係から、森先生の人柄をよく表すエピソードを一つ紹介したい。

それは、日本西洋史学会の第六一回大会のことである。日本西洋史学会は、少し特殊な学会で、常設の事務局は存在せず、大会の運営・事務全般は、会場校となる大学に所属する教員に委任されるという組織である。第六一回大会を日本大学文理学部で開催することになり、当時、史学科の助手であった私はもちろんのこと、史学科の専任教員の森先生・坂口明先生・土屋好古先生、法学部の長沼宗明先生・馬淵彰先生、そして西洋史を専攻するポスドク・院生などにより、第六一回大会準備委員会が組織された。

この準備委員会のなかで、森先生は、懇親会の運営を担当された。森先生は、多くの方がご存じの通り、グルメであり、お酒についても造詣が深かった。そのため、懇親会で提供する料理の試食会を開催されたり、お酒についても味や価格においても皆が納得するものを候補として提示されたりした。このように、森先生によって入念に準備された懇親会だが、残念ながら、開催されることはなかった。第六一回大会が開催される二か月前に、東日本大震災が起こったからだ。

東日本大震災の直後、計画停電や物流の寸断などにより、通常の社会生活さえも見通しの立たないなかで、日本西洋史学会第六一回大会

も、その開催自体が危ぶまれた。準備委員会は熟議を重ねた結果、大会そのものについては開催の方向で準備を進めたが、懇親会の開催については議論となった。その会議の場で、森先生は、懇親会を開催すべきではないとの意見を表明された。震災で多くの方々が犠牲となり、避難生活を余儀なくされ、そして、生活必需品の供給が滞っているなかで、学術的な学会はまだしも、お酒を伴う懇親会の開催は避けられた方が良くと主張されたのだ。懇親会の運営を担当され、ご自身があれほど準備されたものであったにもかかわらず、当時の社会状況を踏まえて決断されたところは、森先生らしいところである。

とはいえ、懇親会は単なる「中止」にはならなかった。準備委員会の会議の場で、研究者同士の交流の必要を訴える参加者の声などが提示されたからである。これらの声に応えるかたちで、準備委員会では、お酒を伴わず、また食事も軽食とする「茶話会」で交流の場を提供することを決めた。もちろん、この「茶話会」の準備に森先生は大活躍される。「茶話会」の運営の担当として、森先生は、軽食の内容についてはもちろんのこと、紅茶やコーヒーなどについてもこだわりをもって選ばれ、「茶話会」の質を高められたのであった。

他にも、森先生に関する逸話は尽きないのだが、最後に、森先生に対する追悼の言葉で、締めくくりたい。昨年の初めに、森先生のご遺稿があるとの情報を聞き、有志を募り、『史叢』一一二号（二〇二五年三月刊予定）にて、森先生の追悼記念号を企画した。この追悼記念に、若輩ながら、私も論考を寄稿した。私自身の現在の研究テーマの一つ

であり、森先生とのつながりの一つでもある記念碑に関するものだ。『史叢』は学術雑誌なので、あまり感傷的なことを書くことができなかった。読者願わくは、次の言葉を、『史叢』一一二号の私の論文の冒頭に、次の言葉を付け加えてほしい。

「この論文を、森ありさ先生に捧げる。」

〈森先生を偲んで〉

竜田皓介（平成一九年度卒）

森先生と聞いて、皆さんはおしゃれで快活、おらかな人柄を思い浮かべるでしょう。お酒と美食、ヨーロッパでの研究旅行を愛する方でした。明るく気さくでフランクな印象とスマートかつ厳格な研究姿勢の対比が印象的でした。

森先生の研究姿勢を伺えるエピソードをいくつか紹介したと思います。

先生は西洋史概説での授業で開口一番にイギリスという呼称は相応しくありませんと発言、通称ではなく正しい呼称を使用しなさいと指導していました。イギリスはイングリッシュからきた通俗的な呼び方で正しい呼称ではありません、正式な名称は「グレート・ブリテン及び北アイルランド王国」であり、略称を使用するならばブリテンと呼びなさいと語っていました。「合同法」とも呼ばれる法律についても、「国

家連合」という用語からいけば正確には「連合法」という訳を使用しなければなりませんと語り、正確な呼称を使用するように訴えています。細部へのこだわりを示すものですが、当たり前とされていることには間違いが含まれており注意深く見ていかなければならないことを示そうとしていたと言えます。また、ブリテンが単一国家ではなく「複合国家」であることに注目させ、連合王国を構成するイングランド、ウェールズ、スコットランド、アイルランドの各地域が交錯するなかで形作られたブリテンの歴史を、立体的に眺められるような授業をされてきました。

また、国の基本になる思想、精神的風土にも注目させようとしていました。西洋史概説の課題図書としてロックの『市民政府論』を読んだレポートを提出するよう求められました。一年生にはかなり難題でしたが、近代国家や議会議政治の考え方を学ばせたことが伺えます。大らかな先生が一年生を相手に「これが読めない学生は真つ当な研究はできません」と厳しい言葉を放ち、課題は提出しても特に解説もされず、もやもやしたのを覚えています。あとがきに要約が書かれていたので察しの効く学生は気にならなかったかもしれませんが、先生の厳しさが感じられる思い出です。専門のアイルランド史では、プロテスタントとカソリックの宗派的対立を強調して、歴史を対立や利害の構図から見えていけるよう学生の歴史への感度を高めようと努めていました。分かりやすい授業づくりを心に砕き、一貫した論理を展開して整然とした授業をされていました。先生は論理の一貫性を保ち、

自分の観点を貫くことの重要性を教えてくださいました。探究することの喜びを得られるよう学生を温かく、ときに厳しく導いていました。

コロナ禍でヨーロッパでの研究が困難になる状況でしたが、インターネットを利用して史料を探索され、カナダのナショナル・アーカイブから第一次世界大戦の膨大な戦没者データを発掘され、個人のバイオグラフィから歴史像をつくる、新しい試みに挑戦されていました。早すぎる死が悔やまれます。

〈森ありさ先生の思い出〉

原田亮太（平成一八年度修了）

森先生は自分にとってどんな人だったのか、今回このような機会を頂き、改めて考えてみた。

一言で表すなら、自己形成に関わる部分に大きな影響を与えてくれた方、というのが適切であろう。二〇代前半の数年間、好きなこと（歴史）により正しく向き合い関わることを教わった。

もともと他大学の学部生だった私は、「僕の非常勤講師仲間のアイルランド史をやってる人がいるよ」という指導教官の紹介で森先生と出会った。

その後院試受験からマスター修了までの数年、ご教授いただいたのは、細かなアイルランド史の知識だけではない。修論完成に向けて自

分の思考を論理的に形成していく方法、史料を読み込む・選択するスタンズ、文章構成員力、歴史事情を捉える視点の柔軟性、ヨーロッパを中心とした歴史の幅広い教養など多岐に渡る。歴史教育を仕事にする今の自分の土台は、間違いなく先生とのこの数年に培われたと思っっている。先行研究の大先輩であるにもかかわらず、未熟な私を朗らかかつ熱心に指導してくださった。

こんなことがあった。ある日私は、先生が翻訳を監修された映画『麦の穂を揺らす風』を劇場に観に行った。後日映画の中で描かれていたリパブリカンのアングロアイリッシュ条約への賛否について感想を伝えたら、自分では考えもしなかった方向からその描き方を考察された。蓄えた知識をもとに歴史を思考し、誰もが気付かない方向から歴史にアプローチしていくあの姿は、歴史学者そのもの。一つの学問を探究するというアカデミックな行為に心からワクワクした瞬間の一つだ。

マスターで研究を終え、一高校教員としての道を歩んでいる自分には、先生と同じように専門的な研究で世の中に有意な役割はたせない。それでも、教科書に出てくる歴史や現在進行形で展開する社会の物事に対して、先生が示されたようなアプローチが可能であることを実体験として知っている。知っている自分だからこそ、日々関わる高校生に、あの日森先生に味合わせてもらったアカデミックなワクワクを、少しでも味あわせることはできると考えている。それはひいては、森先生の生き様を次の世代に引き継いでいくことにつながっているのかもしれない。

森先生が亡くなられて少し後、ご自宅にご挨拶に伺った際、院生時代の同期と久しぶりにゆつくりと話す時間が取れた。その時、彼からの伝聞ではあるけれど、先生は自分と同じアイルランド史を専攻し、マスター論文まで書ききった人（私のこと）が高校の教員として教えていることを嬉しそうに話していたらしい。その指導を受けた一教員として、その言葉は先生にいただいた最後の評価Sである。高校現場は新教育課程となり、自分自身暗中模索・徒手空拳な日々であるが、これからも森ありさ先生の教え子として、胸を張って歴史教育の末端で奮闘していきたい。

末筆となりますが、今回このような形で森先生追悼寄稿文執筆の機会をいただいた文理学部史学科に感謝申し上げます。

## 教員近況

〈大いなる勘違いの果てに〉

田中大喜（史学科教授 日本中世史）

今年度四月に文理学部史学科に着任しました。昨年度は非常勤講師として日本史ゼミナールと日本史基礎実習を担当させていただきましたが、今年度から専任教員としてお世話になることになりました。改めてよろしくお願い申し上げます。

昨年度までは、千葉県佐倉市にある国立歴史民俗博物館に在籍していました。その前の二〇一三年度までは、文理学部と同じ世田谷区にある駒場東邦中学・高等学校という学校に在籍していましたので、教育現場への本格的「復帰」は十年ぶりとなります。学生のみなさんとコミュニケーションを取るなかで、「昔の感覚」を取り戻しつつありますが、目の前の授業準備のみに追われて慌ただしく過ごした、腑甲斐ない初年度になりました。

専門領域は日本中世史で、特に十二世紀から十五世紀半ばにかけての武士団（武家領主）の研究をしています。多様な社会集団が存在した中世社会において、特に武士団という社会集団を研究対象に選んだのは、「中世は武士の時代である」という大いなる勘違いによります。わたしが大学生だった二十世紀末の時点で、そのような理解はとうの昔に相対化されていたのですが、当時運動部に所属して勉強を疎かにしてきたわたしはそうした研究史などつゆ知らず、何の疑いもないま

ま武士団研究の道に足を踏み入れたのでした。当然のことながら、大学院に進学して本格的に研究の世界に入ってからしばらくは、そのツケに随分と苦しむことになりましたが、二〇〇〇年代に入った頃からそれまで低調だった武士団研究の見直しが進められ、新しい視点からの斬新な成果が公表され始めたことは、古典的な武士団研究からの脱却を模索していた当時のわたしにとって幸運でした。

この新しい武士団研究の流れに乗る形で研究を進めることができたわたしは、やがて「研究で勝負がしたい」という若気の至りから一念発起して研究職の公募に挑戦し、幸いにも国立歴史民俗博物館に採用されました。ここは学際的な調査研究を推進する研究機関のため、考古学・民俗学・歴史地理学・美術史学・分析科学といった、わたしが専門とする文献史学以外の多様な研究領域の研究者たちと知り合うことができ、さまざまな分野の学際的な調査研究に従事することができました。ここで得られた研究経験は、研究者としてのわたしにとって掛け替えのない財産になりました。そして、今度はこの経験を次の世代に伝えたいと願い、文理学部史学科に移籍することを決断しました。大いなる勘違いの果てにたどり着いたこの場所で、精一杯、研究・教育活動に従事し、歴史学の調査研究の魅力を伝えていきたいと思えます。



## 日本大学文理学部史学科同窓会

令和5年度 日本大学文理学部同窓会懇親会

2024年3月2日 於：アルカディア市ヶ谷

### 令和五年度卒業論文題目

現在の史学科学生はどのような興味・関心を持っているのか、令和五年度卒業生の卒業論文の題目を一部ご紹介いたします。(順不同)

縄文人とイヌの関わりについて

縄文農耕論

土偶は神像と祖先像のどちらの意味で使われたのか

古墳時代の祭祀遺跡について―奈良県三輪山を中心に

古墳時代における葛城地方の豪族および出土品の考察

諏訪地方の山城の総合的研究

古代日本における踏歌とその政治的意義

古代の出雲国における水上交通と交易

皇位継承から見た恵美押勝の乱に至るまでの二面性

平安時代における母后の歴史的意義

藤原頼長とその時代―保元の乱以前

奥州総奉行をめぐる葛西清重の役割について

鎌倉時代初期から末期にかけての戦争の変遷と要因考察

宇都宮氏一門・笠間時朝の信仰と支配体制

豊島一族が鎌倉御家人として果たした役割

鎌倉期における武具の相伝及びレガリアについて

久米田・教興寺合戦の再検討―「反三好包囲網」の実態をめぐって

岐阜城と比較した安土城の特徴と独自性

高田屋嘉兵衛の日露交渉におけるイメージ戦略

近世大阪の防災意識と記憶の伝承から考える現代の防災

日本近世におけるおみくじの社会的意義

近世から近代日本における美人像の変遷について

民俗学的観点から考える日本人の「異人」観

近代日本におけるコーヒーの普及過程

昭和戦後期の日本における占領軍の調達要求とその影響

外国映画が日本の女性洋装に与えた影響

戦後の売春防止法の死文化について―なぜ売春はなくならないのか？

戦後日本のオリンピック招致とマス・メディアの関係

―第一七、一八回オリンピック競技大会の事例より

明治、大正、昭和時代における女性アイドル像

『オデュッセイア』における「駒遊び」の再考

古代ギリシアの音楽―アリストクセノスの音階理論を中心に

中世イングランドのノルマン・コンクエストによるノルマン化につい

ての再検討

フランス革命後の女性衣装の変化

フランス七月王政下の女性新聞―『自由女性』紙と『女性新聞』紙

二〇世紀初頭の英独外交―英外相エドワード・グレイを中心に

イギリスの第一次世界大戦参戦理由に関する一考察

戦間期アメリカ合衆国におけるカーライフ

フランスのヴィシー政府における対独協力―ユダヤ人問題を中心に

音楽都市リヴァプールとビートルズ

悪女と呼ばれる呂太后―漢代の評価『史記』『列女伝』

東アジアにおける壁画古墳の系譜―四神図を中心に

中国正史における大月史に関する記述変遷についての考察

寇謙之の道教に見られる儒教的要素と北魏太武帝期の政治の関係

文宗皇帝と唐代の女性衣装

明朝の北辺間諜「夜不收」について

―嘉靖年間における活動に注目しながら

索額図とネルチンスク条約

「満洲国」在住小説家が描く五族協和とその実態

「復興碑」から考えるツタンカーメンとアテン神との関係

シャーIIアッバース治世下のイスファハーンの都市形成と水利計画

オスマン帝国のロマニオット

一六〇一―一八世紀のカピチュレーションについて

イスラーム写本絵画におけるドラゴン

## 令和六年度史学科行事紹介

|     |     |   |  |
|-----|-----|---|--|
| 四月  | 二日  | 文理学部開講式   | 文理学部三号館三四〇二教室・三四〇三教室・三四〇五教室<br>で対面にて開催しました。  |
| 四月  | 二日  | ガイダンス開始（四月九日まで）   | 大学院特別講義（十一月八日にも実施）、大阪大学名誉教授<br>の川合康氏による『平家物語』史観と中世史研究」が、文<br>理学部二号館二三〇二教室で行われました。          |
| 四月  | 八日  | 日本大学入学式（日本武道館）  |  |
| 四月  | 一〇日 | 前学期授業開始（七月三〇日まで）  |  |
| 七月  | 一四日 | 文理学部夏季オープンキャンパス   | 田中ゼミ・大学院の合同野外授業。横須賀美術館「運慶展―<br>運慶と三浦一族の信仰―」、神奈川県歴史博物館「仮面絢爛<br>―中世音楽と芸能があらわす世界―」の見学が行われました。 |
| 八月  | 二日  | 夏季休暇開始（九月二日まで）  | 史学科教員による書籍『歴史学の扉 歴史を学ぶということ』<br>が山川出版社より刊行されました。   |
| 八月  | 六日  | 福島ゼミ・粕谷ゼミ・松重ゼミの合同で「二〇二四年度史学<br>科東洋史ゼミナール合同報告会」が、文理学部本館一階ラー<br>ニングコモンズで行われました。 | 冬季休暇開始（一月九日まで）<br>卒業論文受付開始（一月一六日まで）  |
| 九月  | 四日  | 遺跡発掘調査（九月一四日まで）、南中野遺跡において、考<br>古学実地研究の野外実習が行いました。                             | 卒業論文受付開始（一月一六日まで）  |
| 九月  | 四日  | 史料調査（九月五日まで）、田中大喜先生と大学院生数名が、<br>茨城県立歴史館で史料調査を行いました。                           | 史料調査（二月七日まで）、田中先生と大学院生数名が、茨<br>城県石岡市の常陸国総社宮で史料調査を行いました。                                    |
| 九月  | 一七日 | 後学期ガイダンス（九月一九日まで）   | 史学科同窓会が文理学部三号館三三〇五教室において、総会<br>のほか、横山則孝氏による講演会、講演後には文理学部三号<br>館食堂コスモスにて懇親会が行われました。         |
| 九月  | 二〇日 | 後学期授業開始（一月二七日まで）  | 千葉県佐倉市にて、田中ゼミ・大学院の合同遠足が行われ、<br>国立歴史民俗博物館と佐倉城跡の見学が行われました。                                   |
| 九月  | 二二日 | 文理学部秋季オープンキャンパス   | 卒業式（日本武道館）・文理学部学位記伝達式  |
| 一〇月 | 一九日 | 学術研究発表会（史学部会）   |  |

## 令和六年度史学科データ一覧

### 人事異動

着任 田中 大喜 教授（令和六年四月 一日）  
柳 雄貴 助手（令和六年四月 一日）  
長田 鴻倫 助手（令和六年七月 一日）  
土田 鶴子 助手（令和六年十一月 一日）  
退職 長田 鴻倫 副手（令和六年九月三〇日）  
木下 菜央 副手（令和七年二月二八日）

### 令和五年度史学科学生在籍者数

学部生 一年生 一六五名、二年生 一五四名  
三年生 一三四名、四年生 一三五名  
合計 五八八名  
大学院生（M） 一年生 六名、二年生 六名  
合計 一二二名  
大学院生（D） 一年生 〇名、二年生 四名、  
三年生 〇名  
合計 四名

### 編集部より

同窓会会報は現在、ホームページでの閲覧を基本とします。

URLは左記の通りです。

○近況通信を募集しております。ご寄稿を希望される会員の方は、本会報一ページ目記載の住所へご寄稿ください。なお、字数は二〇〇字以内でお願いいたします。

○住所変更等された場合は、本会報一ページ目記載の住所へご連絡下さい。なお、お電話での依頼は、事務局体制の事情により、恐れ入りますが、ご遠慮いただきましたたく存じます。

### 〈編集後記〉

本号は、短縮版の前号から通常の構成に復帰して、全一二頁となりました。また、新生同窓会誌となつて、一〇号という節目も迎えました。十年一昔といいますが、史学科の陣容も、文理学部のカャンパスも、この十年で大きく様変わりしました。これからも、卒業生の皆様に、刻々と変わりゆく史学科の「今」をお伝えしていきたいと存じます。

史学科同窓会ホームページURL  
<http://www.nu-hist-d.jp>